



13

日本固有の義歯と口腔ケア

1 木床義歯

義歯の歴史上、日本独特の「木床義歯」があげられる。木床義歯、木彫義歯 wooden-carved plate denture、木製義歯 wooden plate denture ともいわれる。西洋では、上下総義歯をスプリングでつないで維持を図っていたのに対して、木床義歯は粘膜負担義歯で現在の義歯と大きな相違はなかったほどである。日本独自の文化と歴史によって築き上げられた技術であり、今日の歯科医学では世界の総義歯の原点といわれるほどの高い評価をうけている。

1823年、長崎の出島に来日したオランダ商館付医官シーボルトは、自著『ニッポン』のなかで木床義歯を紹介している。明治期以降、ゴム床義歯が導入されると、それらを西洋義歯と称したのに対して皇国義歯とよばれ、両者を和洋義歯と呼称した。

世界最古の木床義歯

これまでに知られている最古の木床義歯として、1538年4月20日、74歳で死亡した和歌山県東参道南畑の願成寺の草創者、仏姫(中岡テイ)のものがある。黄楊(ツゲ)による一木造りで、前歯部歯型は床形成、右側6歯、左側7歯、白歯部に歯型形成はなされていない。床部の黒色はお歯黒(鉄漿)が塗られている。仏師の製作といわれるが、本人自身が調整し、お歯黒を塗ったのではないかと考えられる。無歯顎に施される吸着維持の総義歯であり、使用された形跡からも十分機能していたものと考えられる。

欧米では1728年、フォシャールの作製、1800年頃、フィラデルフィアのガーデットの吸着義歯があるが、その普及は1855年のグッドイヤーのゴム床義歯まで待たなければならなかったことと比較すると、日本における木床義歯は歴史的な価値がある。

柳生飛騨守宗冬の木床義歯

1927(昭和2)年6月15日、柳生家三代目宗冬の墓から黄楊の木でつくられた上下の総義歯が発見された。誰の作製かはっきりしないが、当時、総義歯をつくれる入歯師は数少なかったことから、柳生飛騨守宗冬の屋敷から遠からぬ麴町で営業していた小野玄入の手によるものと推測されている。

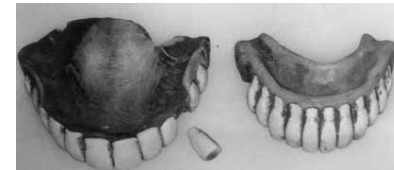
江戸時代の口中医は義歯製作に手をつけないのが原則であった。開業している入歯師の家に伝わる秘法でもあったので、詳しい文章として残ったものもきわめてまれであった。

入れ歯づくりを職業とする専門家が現れたのは、江戸時代に入ってからと考えられる。鎖国政策のもとで、日本独自の文化・技術が画期的な進歩を遂げ、

ガーデット
James Gardette
(1756~1831)

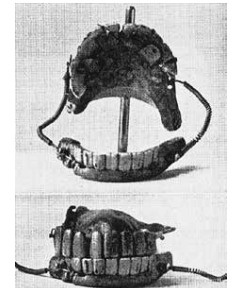
グッドイヤー
Charls Goodyear
(1800~1860)

ジョージ・ワシントン
George Washington
(1732~1799)
アメリカ合衆国の初代大統領。



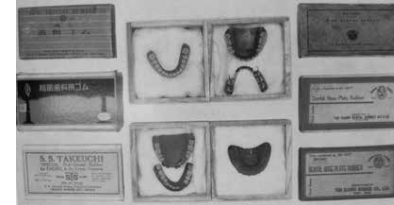
●木床義歯●江戸後期

黄楊の木に天然歯を使用した最高級の木床義歯。歯根を露出させ歯周病を思わせるように彫刻されており、きわめて精巧にできている。(日本大学松戸歯学部歯学史資料室蔵)



●ジョージ・ワシントンの義歯(複製品)●

ジョージ・ワシントンが指示や要望を出し、1798年に改造された金庄印床スプリング付き義歯(グリーンウッド作)。(AN INTRODUCTION to the HISTORY of DENTISTRY in AMERICA B. W. WEINBERGER)

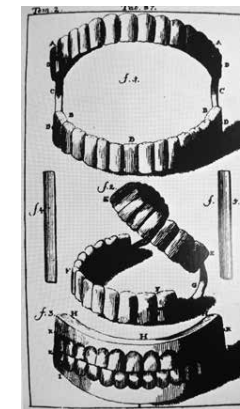


●ゴム床義歯と蒸和ゴム●明治時代
(日本大学松戸歯学部歯学史資料室蔵)



●仏姫の義歯●

(新藤恵久: 木床義歯の文化史。世界に先駆けた日本の職人芸。デンタルフォーラム、1994)



●フォシャールの総義歯●1728年